



♡♡♡④

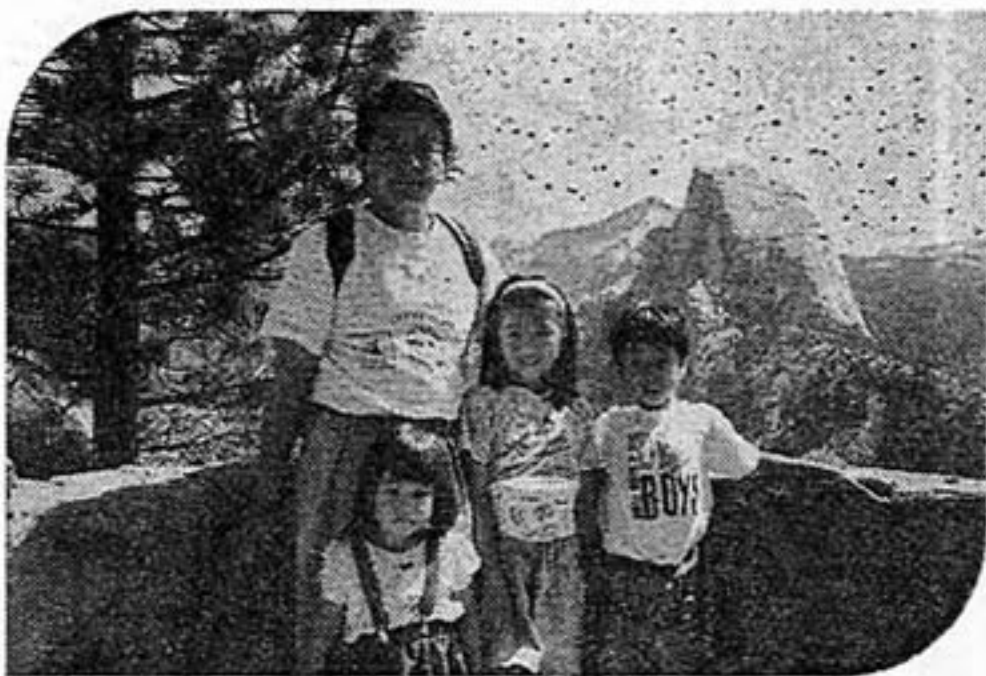
米・ロサンゼルス
6年在住体験
平木 博美

娘は登校拒否 夫と会話続かず…

と逆にしかられ、六歳の娘

と母親の私は
お互い、しっ
た激励した
り、されたり
の毎日だっ
た。
家の中で歩
けるようになって
くても登校は

退院して鏡を見た香織は、髪の毛のそられたのを気にして、登校したくないと言った。友達のお見舞いも嫌だと言った。社会的で、学校も好きな子が、よほどのショックだったらしい。好んでけがをした訳ではない、事故を避けられなかったものか、と私は運転していた自分を責め、泣き暮らす毎日が続いた。しかしママは泣いちゃダメ。ママはいつも笑っていてくれぬと「香織の傷が治るまで」と



香織ちゃん(中央)は、大きくなったら、けがの人を救うため看護婦さんになりたいと話している

思い切って話し合い

みんなが責任を感じて 暗くなっていたとわかる

語補習校の担任の先生がお見舞いに来て、クリスマス会の劇で香織に演じてほしい役がある、と話し、登校するよう誘ってくださった。その夜から、気持ちが

しなすと言いつつ、無理強
いもできず、しなす思いだ
った。そんなある日、日本
は、私も安心した。

小さいころからアメリカにあこがれ、留学もし、駐在生活も大いに楽しんで来た私だったが、事故のショックは大きく、日本に帰りたい思いが強くなっており、登校したくないという香織を口実にいったん帰国しようかとまで思っていた。娘の方が先に精神的にひと山越えたことで、母親も現実から逃げることは許されない、と再認識することになった。

しかし、事故後、主人とも会話が続かないのが私にとっては心の重荷だった。意を決して事故は私の責任だと思っていけないか、聞いてみた。すると思いがけず、主人は主人で、旅行先で具合が悪くなったためにこん

なうになったと責任を感じていたら言いつけはないか。香織も自分の座り方が悪かったと自分を責め、私も自分の運転を責め、皆で自責の念で精神的に参ったのでは傷が治るよんごではないと、家族皆でよくよく認識し合うことができた。その日から、家の中は元のように明るくなり、何でも話し合える雰囲気に戻った。

そのころ、宅配便が届いた。驚いたことに、持って帰るのが無理だとあきらめて病院に置いてきた荷物をすべて、病院が送料を負担して送り返してくれたのだ。病院の配慮にいくら感謝してもきれないほどだった。

交通事故には遭わないですむ方がよい。しかし、私たちは事故に遭ったことで、多くの人の温かい思いやりに触れ、見返りを期待しないボランティア精神の素晴らしさを感じ取った。多くの

の人びとの支えで、娘の命は助けられ、家族のきずなも強くなった。事故が起きたのはだれの責任でもない、私たち家族に与えられた運命だったと思うし、娘がいつも前向きに、明るくその運命を受け入れてくれたことが、間違いなく命を救ったのだと思う。

傷跡が残っているものの、香織は後遺症に悩まされることもなく、元気いっぱい小学生になっている。将来、看護婦になって、ほかの人を助けてあげたい、と話している。(おわり)

監修

小木曾道子

事故を乗り越え 強まったきずな

元気に大きくなった香織ちゃん(左から二人目)と平木さんの家族全員(今年五月撮影)

